《太田記念国際観光懸賞論文　優秀賞》

海外家族旅行が子どもにもたらす効果について

―ハワイの事例研究―

松山 玲気・市川 来夢・上原 武紘・高木 俊秀・高橋 麻美
東洋大学国際地域学部国際観光学科３年

１．はじめに

近年、旅を通じて豊かな人間性を育むという「旅育」が注目されており、「旅育」をテーマとした家族旅行商品も増えている。そうした中で、東洋大学森下晶美准教授は、成長期に家族旅行経験の多い子どもは、成人後、自分の性格や志向においての満足度が高いという調査報告をしている。この人間性とは「適応力」、「自主性」、「コミュニケーション力」、「向社会性・社会性」、「思いやり・精神の安定性」の大きく５つに分類されたもので、海外家族旅行経験はこれらの人間性の形成に有効であるというi。

ではなぜ、海外家族旅行が子どもの人間性に効果を与えるのだろうか。国内旅行よりも海外旅行が有効である理由はどのような点にあるのだろうか。この研究では、海外家族旅行でのどのような行動やシチュエーションが子どもに良い効果を与えるのかを、ハワイを事例として、ヒアリング調査、ウォッチング調査をもとに明らかにしていく。

なお、この論文は、東洋大学国際地域学部・森下ゼミ29名による共同研究をまとめたものである。

２．調査手順と方法

今回の研究では、①国内旅行と海外旅行の違いとその違いから生じる子どもへの影響を仮説として考え、②海外家族旅行が最も効果的である年齢、③調査対象とするハワイの観光資源について調査の対象を絞った。現地調査では、観光資源や施設を訪問し、実際に子どもたちの様子を見学し、担当者へのヒアリングを行った。また、観光地において、家族の様子のウォッチング調査も併せて行い、これらの調査で得た結果から分析・考察を行なった。

２－１　仮説（海外旅行と国内旅行の違いとその影響）

旅行の一番の魅力とは、「日常」という空間から外に出て、普段とは違う景色を見たり、未知の文化にふれるといった「非日常」を体験することである。海外旅行ではこの「非日常性」が国内旅行と比べより大きい。具体的な違いとしては、異文化にふれることができる、言葉の通じない人との交流がある、治安面での危険要素が国内旅行より多い、気候が異なる、必ず飛行機での移動が伴う、などが国内旅行と海外旅行の異なる点として挙げられるが、この中で私たちは、特に「異文化にふれる」「言葉の通じない人との交流」という２つに着目した。

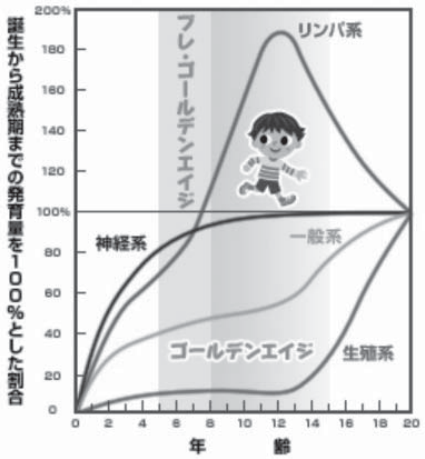
まず「異文化にふれること」だが、海外旅行において自国とは全く異なる景色、人、言葉、食事などの文化にふれた際、子どもは素直に感動し、「もっと知りたい」などといった好奇心が生まれるのではないだろうか。

次に、「言葉の通じない人と交流すること」では、言葉が通じないために相手の言いたいことや気持ちを理解しようとしたり、自分の言いたいことを伝えようとしたりと、コミュニケーションを取るための努力をするだろう。それによって、子どもの社交性が育つのではないだろうか。以上のことから、海外家族旅行でほかの国の人や観光資源、文化にふれることで社交性を身につけ、世界に対する好奇心を持つようになる、という仮説を立て、調査対象となる年齢や施設、観光資源を選択した。

２－２　海外家族旅行が最も効果的な年齢

『子供達の可能性を伸ばすSUKUSUKU TRAINING』によれば、５～８歳ころ（プレ・ゴールデンエイジ）は神経系が著しく発達し（**図－１**）、脳をはじめとして体内にさまざまな神経が張り巡らされていく大切な時期で、この時期の子どもは先入観が少なく、何事にも興味を持つことができるため、この時期に何をするかによって成長に大きく影響するという[(2)]。つまり、５～８歳頃に海外家族旅行をすることによって子

図－１　誕生から成熟期までの発育発達曲線図



出典：子供達の可能性を伸ばす SUKUSUKU TRAINING

どもの人間性への効果はより高まると考えることができる。

２－３　ハワイの観光資源と調査地の選定

ハワイといえばワイキキビーチやダイヤモンドヘッドなどの自然をイメージしがちだが、歴史も深く、アメリカ唯一の宮殿であるイオラニ宮殿やポリネシアンショーなど文化的なアクティビティも数多く存在する。豊富な観光資源を持つハワイには、子ども向けのアクティビティを行っている施設も多く、それらを組み込んだツアーが家族旅行として人気を呼んでいるが、今回私たちは、子供と大人、また言葉の通じない子ども同士が一緒に遊ぶことができる「チルドレンズ・ディスカバリー・センター」、雄大な自然や文化を学ぶことができる「クアロア牧場」、ハワイの文化をテーマに大迫力のショーを鑑賞することができる「マジック・オブ・ポリネシア」の３ヶ所を調査地として選定した。

これらの選定理由は、子供向けのプログラムが充実しており、家族旅行客がよく利用すること、私たちが子供に効果があると仮定した「異文化にふれる」「言葉の通じない人と交流する」シチュエーションが整えられていると考えたためである。この他にも、海外旅行中の家族の様子を探るため、ビーチやショッピング施設を訪れ、ウォッチング調査も併せて行なった。

３．現地調査（子どもと家族の様子）

まずは、現地調査の内容とそこから分かったことをまとめてみたい。

３－１　チルドレンズ・ディスカバリー・センターについて

１）施設概要

チルドレンズ・ディスカバリー・センターは「遊びながら学ぶ」ことを趣旨としている。３フロアの広い館内にはフロア別にテーマがあり、ここでは親と子どもが一緒になって「ごっこ遊び」をしながら創作力を養うことができる。ただ楽しいだけのアトラクションとは違い、子どもが実際に触れたり身につけたりすることで、遊びながら頭を使い、体を使うことで自然にさまざまなことを学ぶことができる。また、世界各国の子どもたちが集まるため、違う国の子どもたち同士が遊びながら交流することも多い。

１階にはファンタスティックユーというフロアがある。ここは、人の体をモデルにした、心臓、口、胃などの大きな模型があり、その中に入って遊びながら体の仕組みや働きを学ぶことができるフロアである。また、同じ階にユアタウンというフロアもあり、ここでは銀行、消防局、テレビ局、スーパー、映画館など、どこの国にもあるような建物があり、子どもたちはそこで「ごっこ遊び」を通して大人になったような体験ができ、他の国の子どもたちとも仲良く遊ぶことができる。２階にはハワイアンレインボーというで、ここではホノルル港、アロハタワー、飛行機の機内を再現した模型があり、子どもたちがハワイの生活を学ぶことができるようになっている。また、３階はレインボーワールドというフロアで、ここは、ハワイに住むさまざまな民族の習慣を、ままごとをしたり民族衣装を身に着けたりしながら学べるところで、ポルトガル、フィリピン、日本、中国、韓国、インド、アメリカ本土などがそれぞれのブースに分かれて展示されている。

２）施設選定の理由

この施設のコンセプトから、①さまざまな国の子どもたちの遊び方や遊ぶ様子を見ることができる、②家族で遊べる施設のため親の子どもへの接し方を見ることができる、③他の国の子どもとふれあう姿を見ることができる、以上のことからこの施設を調査地として前提した。

３）調査の内容と子どもの様子

この施設では、ウォッチング調査とヒアリング調査を行なった。まず、ウォッチング調査では子どもたちはよりリアルな体験をしていることがわかった。これは、この施設の１つ１つのブースが細部まで細かく、本物に近くつくられており、街中をイメージしたフロアでは、スーパーでは、子どもたち同士が実際に売り手や買い手となってショッピング体験をしていた。

また、さまざまな国の子どもたちが言葉を使わずとも、その場の物を使って自分から積極的に仲良く遊んでいる様子が何度も見られ、子どもたちは言葉の壁を感じていないようであった。続いて、施設のヤジマ・ロレッタ氏へのヒアリング調査[(3)]で、ヤジマ氏は、子どもは遊ぶことでイメージ力、創造力、好奇心やライフスキルを向上させるが、他の国の言葉の通じない子どもたち

写真１：チルドレンズ・ディスカバリー・センター内のユアタウンの様子

同士でも遊ぶという共通言語を持っていること、本物に触れることで理解し合うコミュニケーション方法があることなどを述べ、そのような体験をすることは、子どもにとっては遊びが言葉の代わりとなる、つまり、「Play=Universal Language」であると説明した。

写真２：クアロア牧場でのインタビュー調査

３－２　クアロア牧場について

１）施設概要

クアロア牧場は日本の牧場とは規模が大きく異なり、東京ドーム450個分と言う広大な土地で、山や海などの大自然の中でさまざまなアクティビティを体験することで、自然の豊かさやハワイの文化や歴史を学ぶことができる施設である。アクティビティにはハワイの伝統文化であるフラダンスを学べるフラレッスンや、自然の中を走る四輪バギーや乗馬、クアロアの目の前に広がるカネオへ湾でのクルージングなどがあり、ハワイの文化や自然を肌で感じることができる。また、この施設の自然はジュラシックパークやゴジラなどの映画のロケ地にも使用されているため、施設内のロケ地を巡る映画村バスツアーというアクティビティも楽しむことができる。四輪バギーには16歳以上という参加条件があるが、全部で８つの中から好きなものを選んで体験することができる。

２）施設選定の理由

この施設には日本にはないハワイならではの規模の広大な自然があり、さまざまなアクティビティを通して、子どもから大人までハワイの自然や文化にふれる様子を見ることができるのではないかと考えた。

３）調査の内容と子どもの様子

私たちは、ここで実際に映画村バスツアーとカネオへ湾クルーズ、ジープツアーと四輪バギーに参加した。アクティビティを通し、家族の様子をウォッチングしたことで、次のようなことがわかった。一つは、クアロアの自然は日本のものとは規模や景色が大きく異なり、海外ならではの自然を身近に体感することができるということ、二つめに、現地のガイドと子どもが接する機会がたくさんあるということができるということである。実際にジープツアーやバスツアーで、日本人の男の子もおり、その男の子に対して外国人のガイドの方が片言語で話しかけ、ふれ合っている様子を何度も見ることができた。三つめに親が童心に返って子どもと一緒に喜ぶ様子から、ここでは親子の距離感が縮まっているということが見てとれた。クアロアは映画のロケ地に使用されているだけあって、映画を観たことのある親たちは、ゴジラの足跡などのようなロケに使用されたものを見て、子どもと同じくらい喜び、はしゃいでおり、家族全員で楽しんでいた。また、ジープなどの乗り物も日本ではなかなか乗ることができない珍しいものであるため、子どもは乗り物そのものにも興味を示し、興奮しているようだった。

最後に、クアロアの自然を目にして、子どもは自分なりの考えや感想を持っているということを見て取ることができた。クアロアで見かけた日本人の男の子は、クアロアの自然を目にして、「恐竜が出てきそう、追いかけられそう」と想像力の豊かな感想を述べたり、「恐竜の置物を置けば、もっと雰囲気が出るよ」と自分なりのアイデアを出しながらクアロアでのツアーを楽しんでいた。このようにクアロア牧場では日本では見られない大自然の中で、海外ならではのアクティビティに参加することで、ハワイの自然や文化を家族が一緒に楽しんでいる様子を見ることができた。

３－３　マジック・オブ・ポリネシアについて

１）施設の概要

マジック・オブ・ポリネシアは、建物内の広い会場で、ハワイならではの食事を楽しみながら、世界的に有名なマジシャンによる伝統的なマジックや、フラダンスやファイヤーダンスなどのハワイならではのショーを観ることで、ポリネシア文化を肌で感じることができる施設である。室内にもかかわらず、ファイヤーダンスでは本物の火を用いており、さらにはイリュージョンマジックでもヘリコプターを飛ばしたり、雨を降らせたりと、派手で大迫力な演出が観光客からも非常に好評である。また、観客を前に呼び、一緒にダンスを踊ることもあるため、観客も一緒になって楽しむことができる。

２）施設選定の理由

この施設では、ハワイの料理だけでなく、食事をしながらハワイの文化を自分の目や耳で感じることができる。このようなスタイルのショーは、子どもが興味を持つよう

な演出も多いため、子どもの素直な反応を観察することができると考え、調査地として選んだ。

3）調査の内容と子どもの様子

ここでのウォッチング調査では、子どもも大人も日本とは異なる文化にとても驚いている様子を見ることができた。私たち自身も同じ目線で体感したが、特に初めて見たファイヤーダンスにはとても驚き、強く印象に残るものであった。また、日本ではあまり観ることのできないショーを楽しみながら食事をするというスタイルで、子どもが感じたことをすぐに家族に話すことで家族の会話が増え、より家族を身近に感じるきっかけとなるものであることがわかった。私たち自身も、日本に帰って来てからも、このショーの話題で盛り上がることができた。

また、ここでは観客自身も参加する場面があり、言葉が分からなくても表現や演出によって誰でも楽しんでいる様子が見られた。実際に私たちも言葉はあまり分からなかったが、前に出て一緒に踊ったり、歌ったりしてとても楽しい時間を過ごすことができた。

3－4　その他の調査地（ワイキキビーチ、アラモアナショッピングセンターなど）

さらに、私たちはこうした施設、アクティビティの他にも、海外旅行で一般に経験するものでも子どもへの効果があるのではないかと考え、ビーチやショッピング施設、街中でウォッチング調査も併せて行なった。日本人に人気のあるワイキキビーチでは、私たちは日本人の子どもも含め他の国の子どもたちと一緒に遊び、ふれあった。外国人がほとんどであるビーチの環境の中でも、日本の子どもは縮こまったりせず、大いに楽しんでいる様子だった。また、ハワイのビーチでは見ず知らずの人同士が、使わなくなった浮き輪を譲り合うことがあるが、ビーチを訪れた際、私たちも外国人に浮き輪を渡され、知らず知らずのうちにさまざまな国の人と接する機会を持った。

ハワイ最大級のアラモアナショッピングセンターでは、買い物や食事をしている家族の様子を調査したが、店員も陽気な人が多く、日本人観光客に積極的に声をかけていた。このようなウォッチング調査にからは、ハワイでの海や買い物の場で現地の人と触れあえることの出来る機会が数多くあり、言葉が通じない状況でも、子ども達も始めは戸惑いつつも、ジェスチャーなどを用いてうまくコミュニケーションをとっている様子をうかがい知ることができた。

また、街の中には日本では普段見ることの出来ないハワイならではのトロリーという乗り物が走っている。トロリーとは日本の路線バスのようなものだが、日本のものとは違い窓が無く、開放的で軽快な音楽が流れる楽しい乗り物である。日本の子ども達はトロリーに乗りながらハワイの街並みを楽しんでいるようだった。

食に関しては、ハワイならではの伝統的な料理であるロコモコやパンケーキ、シェイプアイスなどは、大きさや量が日本のものと比べても大きく、私たち自身も驚くことが多かったが、こうした海外ならではのものに触れたとき、子ども達はとても驚き、興奮しているようであった。

4．考察（海外家族旅行の子どもへの効果について）

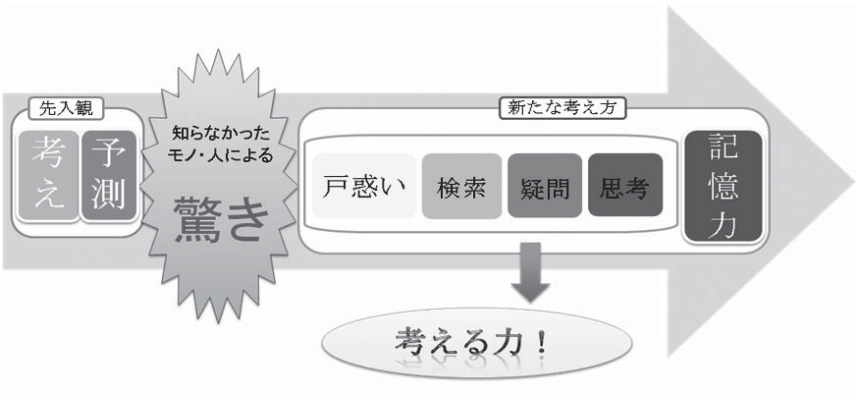
現地調査を通して、「海外旅行ならではの未知の体験」が子どもの成長に効果があるということが分かってきた。未知の体験ではあるが、旅行自体が持つ遊びの要素、また、子どもたちの楽しそうな様子から「海外旅行ならではの未知の体験」とは子どもたちにとってはまさしく遊び、つまり“Play”といえることから、この「海外旅行ならではの未知の体験」を子どもにとっての“Play”と考えてこれからの考察を進めることとした。“Play”とは、学校で習うこと、テレビでみる仮想的な体験と違い、旅行先で実際に触れて楽しんだり、眺めたりする実際の（初めての）体験のことを意味する。つまり、DoやThinkだけではない、「楽しみながら未知のものを体験する」ということである。子どもにとって海外旅行はまさしくPlayの連続であろう。

さらに、海外旅行における“Play”にはさらに受動的、能動的な二つの側面があると考えられる。受動的な“Play”、つまり山や海といった景色、食事、ポリネシアン文化など、現地に足を運び行けば得られるものと、能動的な“Play”、つまりショッピング、キッズプログラム、フラダンス体験などの外国の人と接触を図らなければ得られないものの二点である。海外旅行における受動的・能動的の二つの“Play”が子どもの成長に具体的にどのような効果をもたらすのかを、詳しく考察していきたい。

4－1　受動的な“Play（海外旅行ならではの未知の体験）”で得られる「考える力」

私たち自身も実際にハワイでまず初めに感じたことは「驚き」であった。それは普段生活している日本国内と比べ景色や文化、

図－2　考える力の形成過程



参考：「ココロを動かす技術、ココロを読み解く科学」より作成

総合的な雰囲気が大きく異なっていたためである。一つの例として山を挙げるが、山は青く、木が生い茂っている、というのが私達がハワイへ行く前に持っていたイメージである。しかし、ハワイで見た山は、木は生えておらず、ゴツゴツと角張ったものであった。私達が持っていた山に対する先入観を覆され、とても驚いたことを覚えている。

これを子どもで考えてみたい。心理学者のひろたかなん氏によれば、人はまずこれまでの体験や情報から先入観を持っているが、実際にそれと異なったものに触れた時、驚きを覚え、それを修正使用とする際に戸惑いや疑問が生まれ、それが考える力となっていくという[(4)]。これを、ハワイを体験した子どもに置き換えると、日本にいるときにTVやインターネットなどから得た情報をもとにその観光地に関するイメージを考え、先入観をつくる。そして現地で実際に観光資源に触れたとき先入観とは違うスケールの大きさや自然の美しさに圧倒され驚きという感情へ繋がる。この先入観の訂正から新たな記憶に至るまでの、戸惑いや疑問によって子どもたちの考える力がつくと考えられる。また、この驚きの要素が特に多い海外旅行で、特に子どもへの効果があるのではないだろうか。

４－２　能動的な“Play（海外旅行ならではの未知の体験）”で得られる「自信」

海外旅行では現地の外国人と触れあう機会が数多く存在する。子どもが言葉の通じない外国の子供と交流するというのは、おそらく大きな壁となることであろう。しかし、私たちが行ったチルドレンズ・ディスカバリー・センターでの調査で、遊びという共通言語を通して行動すると、思いのほかコミュニケーションがうまく取れることに気が付く。同センターのヤジマ・ロレッタ氏によれば、子どもは一緒に遊ぶことで違う国の子どもともコミュニケーションを成立させている。「Play（遊び・体験）＝Universal Language（全世界の万人に通じる言葉）」であるというv。

実際に海外旅行で外国人と触れ合うことのできる機会を挙げてみると、私たちが訪れたビーチやショッピングセンター、レストランなどの他に、フラダンス体験、レイメイキング体験、キッズプログラムなどがある。私たちが調査したホテルのキッズプログラムでも、子どもからは当初不安な様子が伺えたが、遊び始めると、五分も経たないうちに他の国の子どもたちともうまくコミュニケーションを取っていた。このような能動的な“Play”を通して子どもが困難を乗り越えた成功体験は自信になる。そして、その経験から次もチャレンジしようという行動力に繋がっていくに違いない。

４－３　家族で旅行する意味

以上のような海外旅行そのものが子どもに与える影響をいくつか指摘することができるが、さらに今回の調査から「家族で行く」ということが大切な要素の一つであることが分かってきた。家族旅行のメリットとしては以下のことが挙げることができる。①家族が一緒という安心感によって素直に感動することができ、挑戦することの後押しとなる。②家族とのコミュニケーションが増え、絆が深まる。例えば、チルドレンズ･ディスカバリーセンターのヤマシタ氏へのヒアリング調査では、大人が子どもと一緒に遊ぶことが子どものイマジネーションを伸ばすのに最も良い方法だという指摘があった。理由としては、大人が一緒にいると子どもは大人の真似をしてさまざまなことに興味を示し覚えていくということ、また、大人が一緒にいることで子どもは初めてのことに対しても恐怖心を持たず、積極的に物事に取り組むことが出来るということが挙げられるようだ。さらに③家族の新たな一面を発見できる、④海外という特別な場所では初めての経験も多く、お互いの行動が強く印象に残るため家族の存在感が大きくなるということである。これは、クアロア牧場での調査の中で、映画のロケ地に使われた場所を訪れた親子の様子から、父親が子どものようにはしゃいでいる姿を見かけたが、これは日常生活ではあまり見ることのできない父親の一面であり、子どもにとっても家族をより身近に感じた瞬間だったのではないだろうか。

以上のように今回の調査から、海外家族旅行の“Play（海外旅行ならではの未知の体験）”が子どもの「考える力」や「自信」につながることが考察できる。また、家族で旅行に行く事で子どもに安心感が生じ、さらに、さまざまなことに興味を持ちイマジネーションを膨らませていくに違いない。海外旅行のさまざまな“Play”が子どもに良い効果をもたらし、家族と一緒という安心感がさらにその効果を高めるのである。

５．おわりに

海外旅行はただ行くだけでも非常に楽しく、充実したものになるが、親が子どもと未知の体験をし、共に遊ぶことが子どもの成長につながるということを認識して旅行をすると海外家族旅行はかけがえのない大きな財産になるのではないか。確かにテレビや雑誌などによって海外に関する知識を得ることも効果的ではある。しかし、実際に海外に行かなければ得ることの出来ない“本物に触れる”という経験の要素が数多く存在する。教育と一言で言っても、その方法にはさまざまなものがあるが、私達は今回の研究を通して、旅によって子どもを育てる“旅育”というものの意味や重要性、可能性は大いにあると感じた。

しかし、“旅育”という言葉はまだ一般的には広く認識されておらず、ましてや「海外に家族で旅行に行く意味」というのはなかなか認識されていないことだろう。海外での旅育の意味をより多くの人に知ってもらうことは容易なことではないかもしれないが、私達は今回学んだことをまずは身近な人たちに積極的に伝えていくことから始めたいと思う。そして将来“旅育”が広く認識され、子どもの成長を促す一つの手段となればと願う。

最後に今回の調査を行うにあたり、協力してくださったチルドレンズ・ディスカバリー・センターのヤジマ・ロレッタ氏、クアロア牧場の遠藤亮氏、そして指導にあたってくださった森下晶美准教授に対し、心より御礼申し上げる次第である。

引用文献

(1) 森下晶美「成長期の家族旅行経験とその影響に関する調査報告」日本国際観光学会『日本国際観光学会論文集』第17号、2010年、49～53頁。

(2) 子供達の可能性を伸ばすSUKUSUKU TRAINING http://www.suku-training.jp/、アクセス日2010年12月10日

(3) インタビュー調査、Ms.ヤジマ・ロレッタ(チルドレンズ・ディスカバリー・センター)、2010年9月22日

(4) ひろたかなん『ココロを動かす技術、ココロを読み解く技術』、新風舎、2001年。

(5) インタビュー調査、Ms.ヤジマ・ロレッタ(チルドレンズ・ディスカバリー・センター)、2010年9月22日